

公益の風 #29

東北公益文科大学 教授

温井 亨



近年私が関わっている都市史について、全国の動向、酒田の状況、そしてささやかな私の成果について述べてみよう。全国の動きを説明するには2014年に設立された都市史学会から始めるのが良いだろう。都市史を研究するには学際的な取り組みが必要であり、都市史学会はそのような組織として立ち上がったからである。しかしより注目したいのは、学会になる前の都市史研究会である。後で述べる酒田の状況に似たものを感じるからだが、この研究会は文献史（日本近世史／文学部）と建築史（その中の都市研究／工学部）の研究者がテーマを決めて、毎月、あるいは年に数回、自分の研究成果を発

都市史研究の現在：これからは地域の繋がりが主役に

表し合う勉強会であったようだ。テーマの一つに「遊郭とその周辺」がある。濠で囲われた遊郭街は小さな都市、都市の似姿だから恰好のテーマであり、また文献と、建築・都市空間の双方から見ないと全体像は見えてこない。

さて、都市史研究会と現在の酒田の状況に似たものを感じると言ったが、それは2022年に鮑海地域史研究会が立ち上がったことによる。類似点と相違点を見てみよう。まず似ていると思うのは、あるテーマで講師が発表する点だが、都市史研究会が互いに発表し合うのに対し、鮑海地域史研究会では講演を市民が聴講しているのが違う。ただ、これまでの郷土史研究会が好事家の集まりという性格が強かったのに対し、史料批判し、既往研究を踏まえて、新たに明らかにした点を明示する等、研究としてのレベルを保ち、それを市民に広げようとしている。また会員も、都市史研究会が史学、建築学を専門とする大学教員と大学院生であるのに対し、鮑海地域史研究会は代表の小野寺雅昭さんも大学で歴史を専攻した専門家で、あるものの、大学に籍はない在野の研究者である。さて、これを中央

に対して地方が劣ると考えるかと言えは違うと思う。というのは、都市史研究の成果は京都、大坂、江戸の三都に偏り、研究者も首都圏、関西に集中して、今後地方をどう研究するかが課題となっているからである。大学はないが古文書は多数あり、その過半が読まれていない酒田のような地方では、鮑海地域史研究会の試みは最先端の意味を持つ。ただ、都市史研究では町絵図などを使った研究が柱の1つだが、酒田では都市史の第一人者であった宮本雅明が全国の湊町を調べ、なかで行った研究を除けば他にないように思われる。

自分のことを書こう。今年、建築学会で、水帳（検地帳、土地台帳であり課税台帳）と水帳絵図使った敷地の変遷を追う研究を発表した。酒田の町絵図を使った研究の第一歩だと思っただけだが、文字を、小野寺さんが教える古文書

勉強会に参加しているのが役立った。その他にも小野寺さんとは、一緒に酒田の町絵図を系統的に史料批判し検討する作業を始めたところである。さて、私はこうした連携の意味があるのではなにかと思っので、さらに2つほど付け加えよう。鮑海地域史研究会の監事には酒田の経済人の西村修さんがいて、壊されそうな町家を次々に買っている。また先日行った遊佐の庭を写真測量する試みには、ドローンの撮影に公益大の広瀬教授、私と小野寺さんに加え、休日作業外にもかかわらず遊佐町文化財課の友野毅さんも参加した。このように地方では、行政も近く、保存再生の実践活動も連続している。こういう所に、東京などになり可能性を感じるのである。

町絵図を

町絵図を



給人町絵図（今回、水帳絵図であることを明らかにした。「酒田市立光丘文庫所蔵」）